

2020年6月14日 礼拝説教要旨

詩編講解説教18 「弱いときこそ強い」

詩編18：32～36、Ⅱコリント12：9～10

第18編を読みますと全体的に死の脅威(5、6)、神の怒り(8、16)、敵や戦いに関する言葉(18、35)があります。それはダビデの生涯を思えば理解できることでしょう。ダビデの人生は戦いの連続でありました。サウルだけではなく、サウルのあとを継いだサウル家との戦い、また自分の息子アブサロムからの裏切りもあれば諸外国との戦いもあった。さらにダビデ自身の弱さ、失敗もありました。バト・シェバの話。それが神さまの怒りをかうのです。でも一方で、そこにも絶えず神さまの憐れみ、救いがあった(3、17、28、36)。ですから人生を振り返れば苦難の連続だったけれども、絶えず神さまに守られ支えられて歩んで来たことがこの18編全体を通して言い表されているのであります。言い換えれば、今日まで人生を歩んで来られたのは自分の力ではなく、神さまによって、その憐れみと赦しによって歩んで来ることができた。その信仰の表明が第18編であると申し上げてよいでしょう。わたしたちもそういうふうに関心を持って自分の人生を振り返ることができればと思います。

そしてその頂点となる告白が32節の「主のほかに神はない。神のほかに我らの岩はない」という部分です。真の神さまを神さまとすること。そして神さまを岩とする。それは神さまに依り頼むこと。そういう岩である神さまを人生の中心に据える時に、わたしの歩みは確かなものとされます。わたしたちは礼拝の中で信仰を言い表しますが、これは一言で言えば「主のほかに神はない」と告白することです。洗礼を受けたその日から、あるいは信仰告白をしたその日から、わたしたちの人生に神さまという堅固な岩が据えられました。それまでは他の何かだったかもしれません。自分自身であったり、あるいはこの世のことであったり、経済や仕事、地位といったものを中心に置く。でもどうでしょうか。それは大変不確かなものであります。現在のコロナ禍においてそれを経験しています。

しかしこれは神さまに立ち返る一つのチャンスなのかもしれません。すべてが壊された時に、唯一壊されないものがある。わたしたちは今それを経験しているのです。それが信仰であり、この礼拝であり、御言葉であります。ある牧師は、集まって礼拝ができなくなり、会堂はもぬけのから。広い会堂で一人御言葉を語る時に、最後に残るのは御言葉だけだということを体験的に知ったと言います。この教会もかつて戦争や洪水、そして地震と多くの試練を経験しました。今回のウイルスもそうですが、何があっても礼拝を守り続けました。すべてを失ってもそれだけが残ったのです。ここに決して失われないものがある。それを岩とする。拠り所とする時、わたしたちの人生も確かなものとされるのではないのでしょうか。「神はわたしに力を帯びさせ、わたしの道を完全にし」(33節)とあります。「完全にする」というのは、紆余曲折あるけれども、修正され、まっすぐにされるということです。それは神さまを人生の拠り所とする時に現実のものとなります。

さらにここには戦いのモチーフがあります。「わたしの足を鹿のように速くし、高い所に立たせ、手に戦いの技を教え、腕に青銅の弓を引く力を帯びさせてくださる」(34～35節)これはサタン、罪との戦いと理解してよいでしょう。こういう変化の時というのは、人々の心も揺れ動くのでサタンの格好の標的となります。しかし神さまを主と告白する、我が人生の岩とするなら、その攻撃をはねのけることができる。「足」「手」「腕」というのは実戦で力を発揮するも

のです。足は俊敏さを示します。何かがあった時にすぐに行動する。「鹿」は山の斜面を軽快に登る姿をイメージさせます。そのようにすばやく安全なところに行く。「高い所」は敵の手の届かない安全なところですが、そこは神さまの御支配と理解してもよいでしょう。そこへすばやく逃げる事ができる足です。

「手」は戦いの技、手段です。詩編144：1に「わたしの手に闘うすべを、指にいくさするすべを教えてください」とあります。戦うためには、むやみやたらに力任せに戦うというのではなく、戦略を練り、賢く振る舞うことも大事です。「へびのように賢く」(マタイ10：16)と主イエスも教えておられます。それこそサタンはへびのように賢く狙っているのですから、わたしたちもそれに対抗する必要があります。口語訳は「わたしの手を戦いに慣らされた」と訳します。戦いに慣れる。それはそういう悪魔の攻撃を経験する中で、そこから学び、同じ失敗をしないということです。そこから戦うすべを習得して次の攻撃に備えるのです。エフェソ書第6章に神の武具を身につけなさいという教えがあります。そこでは「霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい」(6：17)とあります。神の言葉というのは、神の知恵です。神さまの知恵こそ、悪魔の策略に対抗する最大の武器です。わたしたちの揺れ動くところを悪魔は狙います。けれどもそれをはねのける知恵は御言葉によって得られます。

「腕」は、ここに「青銅の弓を引く力を帯びる」とありますが、つまり力の象徴です。力がなくては戦いに勝つことができません。ではその力はどこから来るのでしょうか。「あなたは救いの盾をわたしに授け、右の御手で支えてくださる」(36節) 神さまの御手が支えるとあります。その御手は具体的にわたしたちのところに伸ばされます。「あなたは自ら降り、わたしを強い者としてくださる」(36節) ここは非常にめずらしい表現です。神さま自ら降られて、わたしを強めてくださるということです。ですからこの力は神さま由来ものであり、しかも神さまが自ら降ってこられ、御手をもって支えてくださることがわたしの本当の力となると詩人は言うのです。このことが示していることは何か。伝統的に教会はそれをイエス・キリストの救いの出来事と結びつけました。キリストがこの世に来られ、そして十字架とよみがえりの御業をもって、わたしたちを罪からあがない、神さまの御支配へと高めてくださった。救出してくださった。「自ら降り」(36節)と「高い所に立たせ」(34節)というのは、まさにキリストの受肉から昇天にかけての一連の御業において成就されたこととわたしたちは捉えることができるのです。そしてこのキリストこそ、サタンとの戦いに勝利する最大の力なのです。このキリストがわたしたちに与えられているのです。

ときに、わたしたちは挫けそうになります。自分ではもうだめだと思い、あきらめてしまいそうになる。あらゆるところでサタンの誘惑を受けています。そしてはや戦う力を失っているとさえ感じることもあるのです。でもそのような時に今日の御言葉を思い起こしていただきたい。わたしには青銅の弓を引く力はなくても、神さまの御手がここまで届き、わたしを支えてくださるということ。そのために御子イエス・キリストが自ら降られて、わたしを支え、強い者としてくださっているということ。この後、讚美歌461番を歌います。「主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらず」わたしたちの人生もそのように主によって強められ、支えられた人生であります。そしてキリストはすべてをあがない、赦して、勝利へと導かれるのです。どんなに失敗の多い、ふがない歩みだとしても、悔いの残る人生だとしても、最後にそれを思い起こすことができれば、それで十分感謝なのではないでしょうか。